

# 地域学校協働活動導入後の青少年の居場所

## —居場所研究の視点から考える

駒澤大学総合教育研究部教授 萩原建次郎

### 1. 子どもの視点から見た地域学校協働活動の可能性と意義

「地域学校協働活動」は、平成 27 年（2015 年）の中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」（以下、「答申」とする）において提言され、その意義が以下のように述べられている。

地域が学校との連携を深める中で、子供たちにとって、地域は学校や家庭とは異なる第三の場として安心な居場所となる。また、地域学校協働本部に様々な悩み等を相談できる家庭教育支援の活動や機能が組み込まれることにより、孤立した保護者を支えることにもつながる。さらに、子供たちの非行防止、健全な育成の観点からも、地域学校協働活動を通して、放課後等の安全で健やかな居場所を作り、地域住民等が子供たちの成長を見守っていくことが重要である。（答申、53 頁）

これに従うと、地域と学校が協働・連携することによって①子どもたちにとって第三の居場所ができること②孤立化する子育て家庭にとっても家庭教育支援になること③子どもたちが健やかに育つ地域環境が育まれること、が期待されている。

では実際に地域と学校が連携・協働する活動が、子どもにとってはどのような経験となりうるのか。居場所をめぐる、学生が子ども時代のエピソードを書いてくれた中から、次のような事例を紹介したい。

私の母校である小学校は、川沿いの春になると菜の花畑がひろがっているような場所にあり、学校のすぐそばで鯉のぼりが何百と上がっている。地域の活動団体である「鯉のぼりを上げる会」と学校が連携して、学校近辺のゴミ拾い活動を定期的に行っている。もちろん学校の全体がそのイベントに参加しており、校長から各クラスの担任教師も含めた学校教諭も参加している。（中略）その活動を行うことにより、教師と地域住民とのコミュニケーションも図ることができるし、生徒と家族の関係性も身近に感じることができるため、とてもいい活動であったと私は感じている。

そのおかげもあり、私自身は地域の方々の親睦も深まり、いまだに地域の祭りにも気軽に参加できることのできる関係になっている。地域の方々は、私の理解者ともいえるべき存在であり、小さなときか

ら面識があるので、信用も信頼もある。そんな関係をつくってくれる機会を与えてくれた学校にも地域にも感謝している。（下線部は筆者による）

この事例からは、子ども・若者の目線からみて①教員、保護者、地域の人々との親睦が深まったこと②学校・家庭・地域の関係が身近になったこと③その後の地域参加のハードルも下がったこと④小さい頃からの関係の積み重ねによって信用と信頼関係が育まれたこと⑤それによって地域の人々が「よき理解者」となったことがわかる。

これらはいずれも地域・学校・保護者・子どもの4者の信頼関係にかかわっている。そのことが土台としてあって、子ども・若者の「地域参加」や「居場所としての地域」といったものが生まれているのがわかる。この事例は、まさに地域学校協働活動が期待する「第三の居場所としての地域」「子どもが健やかに育つ地域環境」に直結した好例といえる。

## 2. 地域学校協働活動に含まれる教育期待とその問題点

ところが答申を読み進めると、それだけではない数々の期待が加えられている。例えば以下のような内容である。

今後は、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、社会の状況を幅広く視野に入れよりよい社会を創るという目標を学校と地域で共有し、子供たちが社会に向き合い、自らの人生を切り拓ひらいていく資質・能力を育てていくという観点も踏まえて、より幅広い地域住民が参画し、地域と学校が連携・協働して、活動内容を充実していくことが重要である。例えば、活動に参加する子供たちの発達段階に応じ、地域の協力による職場体験、地域の課題を分析・解決する学習、地域住民等と協働する地域活動の企画・参加など、地域の実情や特色を踏まえて、地域と学校の連携・協働により継続的に活動内容を検討していくことが肝要である。（答申、59頁 下線部は筆者による）

ここでは学校側の正規カリキュラム（社会に開かれた教育課程）のなかに、地域学校協働活動を組み込み、そこに期待する「資質・能力を育む」という視点が入っている。それゆえ、「発達段階に応じた対応」や総合的な学習の時間や生活科などの学習テーマとなっている「地域の課題の分析・解決学習」といった視点も入っている。

筆者は、社会教育活動のこうした「学校化」を危惧する立場にいる。ここに掲げられている期待に含まれる「フォーマルな体験・学習」の特徴は、大人の側が体験・学習内容を事前に価値づけて設定し、体験・学習のプロセスをあらかじめ水路づけた活動である。それは体験・学習を通した何かしらの知識技能や認識の獲得、すなわち子どもの能力発達が目指されるため、体験・学習内容の有用性（役に立つかどうか・できるかどうか）に力点が置かれる。これを「仕組まれた体験・学習」と名付けておく。

このような仕組まれた体験・学習が学校外にまで拡大し、地域・社会、そして放課後や休日の時間にまで及ぶことは、大人の期待する教育的まなざしを子どもたちが四六時中浴びることを意味する。すで

に今の子どもたちは、放課後や週末は塾や習い事で忙しく、筆者が都内 1500 人の小中学生に取った放課後の自由時間に関するアンケートでも、小学生高学年になると 1 時間程度という結果も出ている<sup>i</sup>。また、神奈川県が実施した小学生 12,000 人への大規模アンケート調査でも放課後の遊ぶ時間が少ないと感じている小学生高学年は 49%にのぼる<sup>ii</sup>。このようなフォーマルな教育から離れられる自由な時間、とりわけ遊びの時間が縮小傾向にある中で、さらなる教育期待をかけることは、あたかも日陰のない真夏の太陽のもとで、子どもが大人の視線から逃げ場なく照らし出されていく状況を招く。

ここまで見てきたように、地域学校協働活動には、第三の居場所としての地域づくり、家庭教育支援、地域の大人の学び・生涯学習の充実、「社会に開かれた教育課程」の推進のほかに、「チーム学校」の推進、「コミュニティスクール」の拡大推進、「学校を核とした地域づくり」の推進など、様々な期待が込められている。そのなかで、とりわけ「学校を核とした地域づくり」の内実が、「社会に開かれた教育課程」に伴って、上記のような地域の学校化が一層進み、地域のあらゆる大人が学校と同質の教育的期待とまなざしでかかわることになれば、子どもにとって、その地域は第三の居場所になりえない。

そこで以下では、地域で独自に営まれてきた“もうひとつの教育”の営みとその意味について考えてみたい。

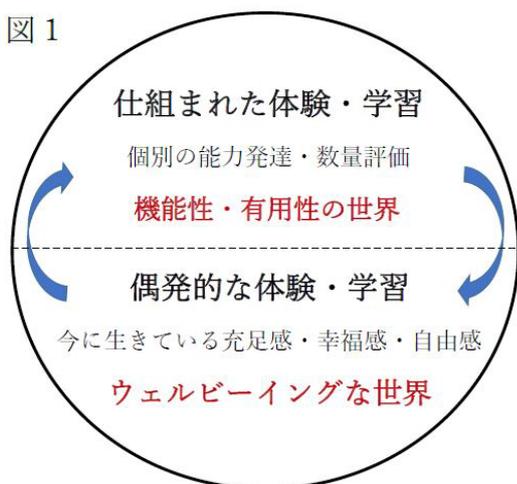
### 3. 地域に根差してきた青少年育成活動と「偶発的な体験・学習」の意義

長い地域社会教育の歴史の中では、学校教育とは異なる、ノンフォーマルな教育として青少年育成活動がある。例えば子ども会やジュニアリーダー活動、ボーイスカウトやガールスカウト活動、青年団活動などが代表的なものになる。そうした団体の活動の特徴は、異年齢異学年が混ざり合い、高校生以上の若い人たちがリーダー役・世話役となり、地域の大人たちと共に野外キャンプや自然体験、クリスマス会や新年餅つき大会などのレクリエーション、郷土芸能の伝承や郷土文化の体験、お祭りやイベントの企画運営など、さまざまな体験や交流を楽しむところにある。そうした体験・交流活動を通じた集団活動の過程で、同年齢・異年齢の子ども同士が学び合い、育ち合うことを大切にしている。リーダー役・世話役の若者たちに対しても、地域の大人は見守ったり相談に乗ったりしながら、彼ら彼女らが、自分たちの発案で企画し活動をする過程で、責任ある一人前の大人になっていくことを応援している。

このような青少年育成活動には、仕組まれた体験・学習とは異なる体験・学習の意味が隠れている。それは子どもたちの自由な探索過程で、偶発的に未知なる世界と出会い、これまでの自己がゆさぶられ、新たな意味を発見したり、今ここに生きていることの充足感を得たりする意味での体験・学習である。このような体験・学習を、仕組まれた体験・学習と対比して「偶発的な体験・学習」と名付けておく。このような体験・学習は子どもたちの活動の喜びや楽しさ、幸福感や自由感と深く結びついている意味で、ウェルビーイングな体験・学習といってもいい。

それがもし学校の正規のカリキュラムとして展開されるとしたらどうなるか。体験・学習を通して、「それで何を得たのか」「何がわかったのか」「何ができるようになったのか」「何の役に立ったのか」といった有用性の視点や、個別の能力発達の視点から評価され、点数化されたり、数値化や数量化が要求

図 1



されたりしかねないだろう。これでは偶発性に富む体験・学習のなかで育まれる、人や自然、事物との関係の冗長性（厚みや豊かさ）、楽しさや自由感、幸福感（ウェルビーイング）が台無しになる。

もちろん、さまざまな体験・学習活動には「仕組まれた体験・学習」と「偶発的な体験・学習」の二つの異なる側面が混在している。きっかけは仕組まれた体験・学習であっても、そのなかで偶発的に学ぶことも発見することも、楽しさや喜びを感じることもある。あるいは、偶発的な体験・学習が起こりうることをねらいとしながら企画し、仕組むということもある。

そうした二つの異なる体験・学習は排除しあうわけではなく、互いに絡みあっている（図1）。

#### 4. 子どもたちのウェルビーイングの視点で地域学校協働活動を

その意味で地域学校協働活動には、この二つの体験・学習が含まれ、「フォーマルな教育」と「ノンフォーマルな教育」とが混在する。しかし先述のように、子どもたちの放課後の多忙化と学校化が拡大進行しており、大人が期待する有用性の世界が、子どものウェルビーイングな世界を強く圧迫している状況下にある<sup>iii</sup>。だからこそ地域学校協働活動では、これ以上の学校化が進まぬように注視しながら、地域の青少年育成活動が営んできた“もうひとつの教育”の意義を認めて、学校と地域のそれぞれの善さを対等に生かし合えるかが鍵となる。

例えば、全国各地には青年団や保存会が地元の民俗舞踊や和太鼓を地元子どもたちに伝承する活動がある。若者人口が大都市に集中している現在も、このような郷土芸能の世代継承が生活の一部として息づいている地域もある<sup>iv</sup>。なかでも東北地方、とりわけ岩手県は芸能の宝庫ともいわれており、郷土芸能が地域の人々の絆づくりや彼ら/彼女らの生きる活力として重要な役割を果たしている。東日本大震災のときには、津波で流された舞踊の衣装や道具を探しだして修復し、いち早く郷土芸能祭を復活させた地域もある。それは郷土芸能が単なる「保存」の対象ではなく、世代を繋ぎながら人々の絆を維持し、生まれ育つ郷土の歴史文化と個々人のアイデンティティをつなぐ重要な意味を持っているからでもある<sup>v</sup>。

地域学校協働活動で言えば、岩手県岩泉町小本地区で長年取り組まれている郷土芸能「中野七頭舞」の伝承活動は、地元小学校教員の発案をきっかけとして学校教育システムに組み込み、地元の保存会の人々が学校に赴いて直接子どもたちに教えていくという、先駆的な取り組みがある<sup>vi</sup>。ここでは日々の練習での地域の大人と児童・生徒たちとの交流それ自体に、人と関わることの楽しさ・喜びの感得や、人付き合いの作法や人間関係の機微などの学びがあったり、上級生が下級生に郷土芸能を伝えることで、子どもたち自身が育成指導の難しさを経験したりするなど、青少年育成の多様な側面が含まれる。晴れの舞台では、地域内外の多くの人々からの応援や感想も受けとり、社会的な承認体験としても大きな意

味を持つ<sup>vii</sup>。

このように、地域の大人も含めて、子どもたちの生きる喜びや生命の躍動、生きていることの充足感（ウェルビーイングな世界）と深く結びつく、地域に根差した伝統芸能・音楽・文化活動の意義は大きい。近年、部活動の学校外団体への移管などが話題ともなっているが、このような地域の青少年育成活動（者）が学校に入って協力するという視点は、学校とともに地域全体を育む重要な契機にもなるだろう。

---

<sup>i</sup> 総務省行政評価局「子どもの居場所に関する調査報告書—子どもの視点から見た公園の現状と今後に向けた提言」2021年

<sup>ii</sup> 第11期神奈川県生涯学習審議会専門部会「神奈川県における放課後の子どもの居場所づくりに向けた実態調査研究調査報告書」2014年

<sup>iii</sup> 大人の期待する有用性の世界が子ども・若者のウェルビーイングな世界（生命性・存在性の世界）を圧迫していることの問題については、拙稿「青少年育成支援の10年をふりかえる—子ども・若者の生の全体性の回復に向けて」公益財団法人よこはまユース「YOKOHAMA EYE'S2021」2022年、および「<トポスとしての居場所>を再建する—若者の生の充溢に向けて」「社会教育」2022年10月号で詳しく扱っている。

<sup>iv</sup> 2022年11月で70回目を数える日本青年団協議会主催の「全国青年大会」は、全国から地域青年団が東京に集い、体育祭と文化祭を行っている。そこに郷土芸能部門があり、若者たちが地元の芸能を継承している成果を発表している。第69回大会（2021年）の様子はYouTubeで見ることができる。

[https://www.youtube.com/watch?v=kTWN7h19yrA&ab\\_channel=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E9%9D%92%E5%B9%B4%E5%9B%A3%E5%8D%94%E8%AD%B0%E4%BC%9A%E5%9F%B7%E8%A1%8C%E9%83%A8](https://www.youtube.com/watch?v=kTWN7h19yrA&ab_channel=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E9%9D%92%E5%B9%B4%E5%9B%A3%E5%8D%94%E8%AD%B0%E4%BC%9A%E5%9F%B7%E8%A1%8C%E9%83%A8)

（2022年9月閲覧時）

<sup>v</sup> 菊池龍三郎「地域の教育力の分析の視点に関する一考察」『日本生涯教育学会年報5号』、1984年ならびに萩原建次郎『居場所—生の回復と充溢のトポス』春風社、2018年

<sup>vi</sup> 阿部未幸「地域における郷土芸能の役割と今後の可能性 — 岩手県岩泉町『中野七頭舞』を事例として —」岩手県立大学総合政策学会編「総合政策」第15巻第2号、2014年では、「中野七頭舞」の伝承活動が生み出す地域内外の人的ネットワークの広がりや子ども・若者の人間形成に与える意味、地域の人々やコミュニティ形成に与えている意味などを実証的に明らかにしている。

<sup>vii</sup> 岩泉町小本地区では、東京に活動拠点を置く東京民族舞踊教育研究会と地元保存会の協力のもと、地元以外の人々も対象とする中野七頭舞の講習会を開いてきた。筆者も学生時代に小本地区にある小本小学校に赴き、保存会の方々から教わった経験がある。